

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22720305

研究課題名（和文）在来産業と小規模家族経営の構造と論理に関する歴史地理学的研究

研究課題名（英文）The Research about the Structure and Logic of the Conventional industry and the management by the small family

研究代表者：

湯澤 規子 (YUZAWA NORIKO)

筑波大学・生命環境系・准教授

研究者番号：20409494

研究成果の概要（和文）：本研究は日本における在来産業と小規模家族経営の構造と論理を歴史地理学の視点から解明することを目的とした。事例 1 として人間織物業地域におけるレース産業の展開に着目し、地域の産業構造と家族の変化が相互に関連しあっていることを明らかにした。事例 2 として山梨県甲州市勝沼の葡萄栽培と葡萄酒醸造業に着目し、在来産業から近代産業への移行過程を明らかにした。両事例とも、新たな一次史料の発見を伴い、その整理・公表も本研究の成果の 1 つとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this article is to clarify the structure and logic of the conventional industry and the management by the small family in a frame of historical geography. The first case study was the lace industry in the Iruma textile production area. In conclusion, this paper analyzed the correlation between the industry in the area and the change of family. The second case study was the vine culture and the wine in Katsunuma village Koushu city Yamanashi prefecture. In conclusion, this paper analyzed the process to change over from conventional industry to modern industry. The two case were similar in result that had the discovery of sources, and the open the sources was a important result, too.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 22 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 23 年度	600,000	180,000	780,000
平成 24 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：農業史

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：歴史地理学

1. 研究開始当初の背景

(1) 在来産業と家族の地域史からの発展

筆者はこれまで、日本の伝統的織物業地域である結城紬生産地域を事例として、家族内分業の実態を把握し、小規模家族経営の構造と論理を解明してきた(湯澤 2009)。従来は工業

地理学における地場産業研究として注目されることが多かった当該地域を、地域に暮らす人々と家族のライフヒストリーから再検討する試みは、日本経済、あるいは地域社会における家族のあり方や役割、その時代的特徴を問い直す作業につながった。それは千葉

県銚子市における漁村の調査においても共通した成果が得られた(湯澤 2008)。これらの研究を通して、日本における小規模家族経営の構造と論理は、日本の在来産業の構造的な特徴にもつながっていることが示唆された。

(2) 日本経済の基層構造としての小規模家族経営の再評価

筆者は上記のような研究過程において、複合的生業構造を特徴とする小規模家族経営が、日本の近代化、およびその後の経済発展を根底で支え、日本の経済構造の基層として重要な役割を果たしてきたと考えた。その理由は以下の2点である。

第一に、高度経済成長期を経てサラリーマン世帯が急増する以前の日本社会において、職住が一致し、その暮らしが家族労働力によって支えられている場合が多かったことが挙げられる。例えば農家、漁家、小規模な商家や工場などがこれに該当し、そこでは家族構成員が総出で働く姿が一般的であった。

第二に、日本では多様な複合経営が展開してきたことが挙げられる。例えば農家といってもその内実には土地に依拠した農業生産に加えて、商業、加工業、諸稼ぎを含めた多様で複合的な経営が見出される。各地域に展開した家族経営に内包される様々な就業が後に、資本主義を本質とした近代化とは異なる側面から日本の経済発展を支えたという解釈は、在来的経済発展論という枠組みの中で議論されている(中村 1976、谷本 1998)。

(3) 在来的経済発展論の成果と課題

在来的経済発展論は、これまでの経済史において主軸であった単線的な経済発展論に対して複線的な経済発展論を提唱することで、新たな歴史的解釈を可能にした点で重要である。しかし、その分析の中心は明治・大正期における近代化であり、研究対象は主に第二次産業、とりわけ織物業に重点が置かれている点で、なお見落としとしてきた部分があると言わざるを得ない。

具体的に言えば、次の3点が課題として残されている。第一の課題は、明治・大正期の近代化において重要と指摘された在来産業と近代産業の相互補完関係はその後、どの時期まで継続したのかを現代に至るまでの通時的分析によって明らかにすることである。筆者は特に、第二次世界大戦後の高度経済成長期における経済構造の変化を分析の射程に入れることが重要であると考えている。第二の課題は、第二次産業だけでなく、第一次、第三次産業をも含めた在来産業と近代産業の関係史の構築を目指すことである。地域資源の多様な活用を背景として発達した日本の諸産業の展開を理解するためには、産業間の相互関係にも言及する必要がある。これを第三の課題とし、地域ごとに異なる経済発展構造を解明する。日本の中での地域比較研究

を進め、その共通点と相違点の抽出を試みることで、日本経済の基層構造を相対的視野から解明することが可能となる。

2. 研究の目的

本研究は、在来産業と近代産業の展開と構造を視野に入れて、日本における在来産業と小規模家族経営の構造と論理を歴史地理学の視点から解明することを目的とする。日本の近代化を支えた在来産業と近代産業の相互補完関係については在来的経済発展論として提示されている。その視点をふまえて本研究では日本の産業において小規模家族経営や家族従業者が果たしてきた役割の重要性を指摘してきた。本研究ではこれを在来的経済発展を支えた経済構造、すなわち「在来的経済構造」の具体的解明の一步と位置づけ、さらなる地域実証研究の蓄積によって、近世から現代まで、特に高度経済成長期の変化を含めた通時的分析によって再検討し、在来的経済構造の特徴とその変化過程を検討する。

3. 研究の方法

(1) 研究方法

上記本研究の問題意識を具体的な4つの課題として提示する。まず課題1として各種統計によって産業構造の全体像を把握し、事例研究を相対化する枠組みを構築する。課題2から課題3はこれまで調査を進めてきた結城紬生産地域との比較研究として位置づける。課題2ではレース・刺繍産地の特徴と歴史的展開を比較する。在来的経済発展論の事例となった人間織物業地域のその後の展開を視野に入れて分析し、さらに地理的条件の異なる越後織物業地域との比較を試みる。課題3では第一次～第三次産業をも含めた在来的経済発展論の検討を進めるため、山梨県旧勝沼町における果樹栽培とワイン醸造業の調査を進める。以上の実証研究が蓄積されたうえで、課題4として事例地域の比較検討を行い、在来的経済構造の意義とその転換点を解明する。

(2) 史料と分析

まず、課題1に関しては明治初年の産業構造を「府県物産表」等から検討し、日本の産業における家内工業率の高さを指摘した古島(1962)、産業資本確立期の工業分布を「工場統計表」から明らかにした江波戸(1964)、近代産業と在来産業の構造変化を示した関(1997)の成果を総括し、その後の展開として新たに「工業統計」を用いて現代に至る通時的把握を試みる。

課題2に関しては、①人間織物の織元であった平山仙太郎が昭和4年に設立した「平山レース工場」に着目して調査研究する。当該工場の経営史料等については未だ明らかになっていないため、史料の有無を確認するこ

とから始め、関連資料の収集に努める。予備調査により所在が明らかになった社内報『むつみ』(昭和25年～昭和43年：全16巻)の分析を進めると共に、元従業員への聞き取り調査を実施する。さらに②として越後織物地域におけるバテンレース工業の展開と構造について調査する。昭和初期における日本のレース製造は「主として家庭に於ける婦女子の副業で、欧米の如く一大機械工場と化したそれに比して全く同日の談ではない」状況であった。現在の新潟県高田市周辺は横浜からの技術移転によって明治後期にはレース工業が成立した地域の一つであった。この地域を対象とし、織物業地域における後継工業としての位置づけを検討すること、①と比較して機械生産と手工業生産の展開を比較することができる。

課題3に関しては2008年～2009年の2年間にわたる予備調査で発見した大日本山梨葡萄酒会社および宮光園の史料群を用いてそれら进行分析する。未整理史料の目録作成、閲覧、撮影を実施し、分析を進める。

課題4に関しては、以上の研究の進捗状況を鑑み、研究成果を総括する。

4. 研究成果

(1) 人間織物業地域における平仙レース工場の展開と構造

埼玉県人間地域は、幕末から明治・大正期にかけて全国でも有数の綿織物生産地域へと成長した地域の一つである。この人間織物生産地域における有力な機業家であった平岡仙太郎家は、大正末期にレース工業に着目し、人間市仏子に平仙レース工場を設立した。平仙レース工場はとりわけ第二次世界大戦後、その生産量では日本有数の工場となり(表1)、昭和35(1960)年以降は事業の拡大に伴って、より周辺の農山村にも分工場を設立し、昭和60(1985)年まで操業を続けた。

都道府県	1954年		1969年	
	生産量 (平方メートル)	割合(%)	生産量 (平方メートル)	割合(%)
栃木県	50,000	1.45		
群馬県	52743	1.53	203,540	1.68
埼玉県	1,588,588	46.09	4,858,231	40.09
富山県			179,763	1.48
石川県			336,112	2.77
愛知県	115,340	3.35		
			878,295	7.25
京都府	617,695	17.92	4,821,791	39.81
大阪府	745,831	21.64	836,544	6.91
兵庫県	232,699	6.75		
奈良県	40,910	1.19		
岡山県	2,720	0.08		
合計	3,446,524		12,112,276	

資料：「工場統計表」(1954年、1969年)
注1)1954年の全国事業所数は21
注2)1メートルは91.44センチメートル

当該地域の少なからざる人々は、平仙レース工場およびその分工場が立地したことにより、農山村生活から工場生活、企業生活への変化を経験した(表2)。

本節では、このような都市近郊農山村における人々の暮らしと地域の変化を、住民の経験や就業履歴に対する聞き取り調査、当時の記録としての社内報『むつみ』を通して明らかにすることを目的とした。その結果は以下のようにまとめられる。

人間織物生産地域およびその近隣・周辺地

表2 平仙レース工場従業員(昭和26年)

出身地	男		女		計
	男	女	男	女	
飯能	9	38			47
元加治	19	41			60
加治	1	9			10
精明		11			11
南高麗		13			13
高麗		16			16
高麗川		5			5
原市場	4	11			15
吾野		17			17
東吾野		14			14
名栗	1	9			10
高萩	1	14			15
毛呂山		7			7
大家		2			2
越生		1			1
梅園		2			2
川角		1			1
入西		1			1
豊岡	10	16			26
金子		10			10
東金子		20			20
藤澤		5			5
三ヶ鳥	2				2
入間川	2	8			10
水富	3	12			15
柏原		4			4
奥富		1			1
大東		3			3
霞ヶ関		2			2
所沢	1	2			3
吾妻	1	6			7
山口		4			4
小手指		1			1
富岡		1			1
堀兼	1	1			2
川越	3	2			5
高階		1			1
比企		1			1
今宿		1			1
菅谷		1			1
大河	1				1
東京		6			6
小木曾		4			4
成木		1			1
青梅		1			1
石神井	2				2
自由ヶ丘	1				1
日暮里	1				1
合計	63	324			387

資料：『むつみ』第2号(1951)、66ページ。

域において、平仙レース工場そのものは住民たちの高度経済成長期の経験と深く結びついていた。その経験とはすなわち、第一に機械を扱う工場勤務という経験である。これは近隣農山村から入社した女子従業員にとっても、分工場が立地した周辺農山村の人々にとっても共通する経験であった。第二にあげられるのは、寮生活を通して得た、新しい価値観の経験、新しいモノの経験である。農山村の暮らしとは全く異なる寮生活の中で、教養講座などを通じて新しい時代を実感した経験や、ミシンや水洗トイレ、レースとウェディング・ドレスに触れた経験は、中学を卒業後にレース工場に勤

め始めた女子従業員の当時の記録や聞き取り調査の中でとりわけ鮮明であった。第三にあげられるのは、農林業から製造業への転換という経験である。これは特に、分工場が立地した周辺農山村に暮らす人々が経験したものであり、彼らの就業履歴は衰退する林業とそれを代替する製造業の登場という地域の産業構造の変化と密接に関わっていた。

本稿ではさらに、それらの経験の意味と地域の変化を地域の人々の視点からを検討するため、分工場が立地した名栗村に焦点をあてて、聞き取り調査によって住民の就業履歴を検討した(図1)。



図1 平仙レース本社および姉妹工場の分布
『むつみ』16号(1968)64頁より作成。

事例とした各氏はいずれもその就業履歴の中で平仙レース工場と関わり、林業、農業、養蚕業からレース製造業へという地域全体の産業転換を具体的な就業の変化として経験した点で共通していた。しかし、彼らの経験を子細にみると、人々にとっての変化の諸相はそれほど単純ではなかった。農林業から工場勤務へと変化したことで、就業形態、賃金、生活サイクル、求められる技術が明確に変化した一方で、仕事に対する姿勢や意識、技術向上の努力などは異業種への転換の中にありながらも連続的に持ち続けられており、その連続性によって平仙レース工場が支えられていた。つまり、従来の地域や暮らし

が新しい地域や暮らしへと変化する過程は、断絶性と連続性の両側面を含みつつ、その両者が相互に影響し合いながら進行するものであった。

以上の内容を「都市近郊農山村における高度経済成長期という経験-住民の就業履歴および平仙レース社内報『むつみ』の分析を通して」国立歴史民俗博物館研究報告 171、2011、pp. 43-64 として発表した。

(2) 明治前期における山梨県甲州市勝沼の葡萄栽培と葡萄酒醸造業の展開と構造

本節では、山梨県八代郡祝村に設立された葡萄酒会社を事例として、明治前期の日本における新しい産業の導入過程とそれを支えた担い手の特徴を地域社会との関わりから明らかにすることである。

日本における葡萄酒醸造業は明治前期の揺籃期を経た後、発展期を迎えた。その中で最も早く葡萄酒醸造業が試みられたのは山梨県であった。山梨県は大正期には日本有数の葡萄酒醸造業地域となった(図2、表3)。

このような動向の前史として特に葡萄酒醸造業の揺籃期に着目すると、県内では県の勸業政策だけでなく、祝村における葡萄酒会社設立という2つの動向がみられた。

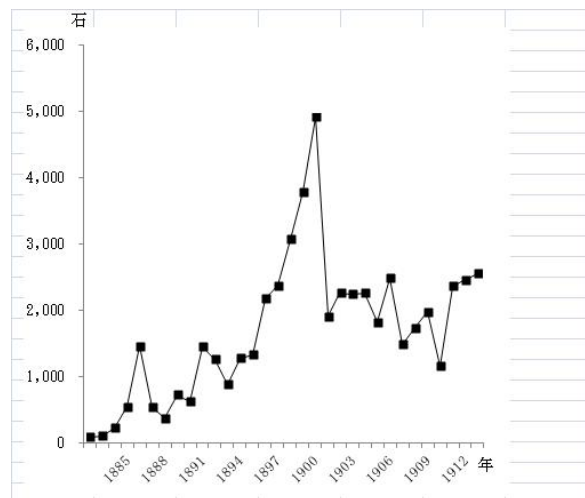


図2 日本における葡萄酒醸造石数の推移

資料：『大日本洋酒醸造史 洋酒篇』 55-57頁より作成。

対象とする祝村で新たな事業が複数試みられた背景には、養蚕・製糸や葡萄栽培等、商品生産に傾倒する同村の農業構造が関係していた(表4)。

祝村葡萄酒会社の担い手は発起人、株主、醸造技術者、葡萄栽培者であった。発起人、株主、醸造技術者、葡萄栽培者は重複しており、一人の主体が複数の役割を担っていた。これは、彼らが投資家としてだけでなく、農業や醸造の技術普及者、村政を担う地域的主体として葡萄酒醸造業に関与したことを意味している(表5)。

表3 府県別葡萄酒醸造場数および石高(大正3年)

府県名	場数	石数	(%)
山梨	45	1,550,841	80.8
山形	22	207,570	8.1
新潟	9	192,580	7.5
茨城	5	175,000	8.8
長野	46	119,835	4.7
青森	4	98,735	3.9
神奈川	4	58,060	2.3
福島	23	34,230	1.3
愛媛	2	21,543	0.8
兵庫	5	19,858	0.8
岩手	178	16,735	0.7
東京	1	16,300	0.6
栃木	26	12,580	0.5
石川	10	12,433	0.5
埼玉	8	11,050	0.4
佐賀	2	6,270	0.2
宮城	7	3,000	0.1
群馬	7	1,721	0.1
岡山	5	1,251	0.0
三重	1	14	0.0
合計	410	2,559,606	100.0

資料：『大日本洋酒醸造沿革史 洋酒篇』52-54頁より作成。

表4 明治13年東八代郡祝村物産表

	種類	数量(石)			金額(円)			金額割合(%)		
		数量	金額	割合	数量	金額	割合			
普通物産	米	830.0	8,300.0	7.4						
	粟	2.2	22.0	0.0						
	大豆	62.0	620.0	0.6						
	蕎麦	37.0	240.5	0.2						
	蜀黍	240.0	1,800.0	1.6						
	玉蜀黍	8.8	44.0	0.0						
	大麦	870.0	5,655.0	5.1						
	小麦	330.0	3,135.0	2.8						
	糯米	68.0	850.0	0.8						
	計		2,448.0	20,666.5	18.5					
特有物産	種類	数量(斤)	金額(円)	金額割合(%)						
	実綿	1,200.0	87.6	0.1						
	繭	24,500.0	33,125.0	29.6						
	生糸	6,120.0	44,676.0	40.0						
	藍葉	3,125.0	156.0	0.1						
	葡萄	180,000.0	10,800.0	9.7						
	蚕種	200枚	140.0	0.1						
	桑葉	42,000.0	2,100.0	1.9						
計			91,084.6	81.5						
合計			111,751.1	100.0						

資料：飯田文弥『近世甲斐産業経済史の研究』国書刊行会、1982、204頁より作成。

明治 12(1879)年に初めて醸造が開始されてから明治 17(1884)年に至る経営動向を見ると、醸造石数、葡萄酒販売額は減少しているものの、純利益は増加した。その後、約 2 年間の株主総会の議論と準備を経て、同社は明治 19(1886)年に解散した。

既往の研究では同社の設立と解散に至る経緯は、第 1 に醸造技術、販売方法、市場開拓の未熟さ、第 2 に発起人や株主たちの極めて営利的な投資活動が松方デフレを背景に動揺したことが経営の失敗を招く結果となったと解釈されてきた。

表5 醸造用葡萄の売主(明治14年)

区	株	氏名	品種	棚	貫目	
勝沼		網野茂左衛門	和	5		
		市川四郎兵衛	和	1		
祝	上岩崎	川崎吟平	洋		1.11	
			和	28	176.00	
		○川崎善左衛門	和		46.80	
		○三枝行証	洋		1.35	
			和		31.50	
			志村七郎左衛門	和	5	
			田口五郎兵衛	洋		1.60
		竹田与惣右衛門	和		16.20	
	下岩崎	◎雨宮彦兵衛	洋		1.00	
			和	9		
			洋		12.80	
		○雨宮弥右衛門	和		3.40	
				4		
		◎内田作左衛門	洋		21.50	
		和		151.80		
			3			
○内田庄兵衛		洋		0.85		
		和		4		
	砂田清作	和		3		
	○高野正誠	和		10		
	○高野積成	洋		57.00		
	◎土屋勝右衛門	洋		11.30		
		洋		3.95		
	土屋半甫	和		31.40		
			1			
		前田国荒	洋		5.10	
	◎宮崎・内田	和		36.80		
	◎宮崎市左衛門	和		132.55		
		武藤太右衛門	和		2.10	
	○渡辺武右衛門	和		3		
加納岩	○和田弥次兵衛	洋			39.50	
粕尾		大善寺	洋		21.20	
一桜		加藤庄兵衛	洋		5.80	
不明		鈴木甚五右衛門	和		4.70	
				2		
		○鈴木小左衛門	洋		5.10	
			和		8.20	
			武藤太右衛門	和		2.10
			雨宮沖右衛門	洋		0.80
			内田四郎兵衛	和		12.50
					30	
		小田川孫兵衛	和		18	
		川崎惣兵衛	和		15	
		川村	洋		3.00	
合計				141	849.01	

注1) 和葡萄と洋葡萄の区別を明確にするため、洋葡萄に網掛けをした。

2) 祝村葡萄酒会社の発起人には◎、株主には○を付記した。

資料「明治十二年 葡萄買入帳」1879年8月、山梨県立博物館蔵、葡萄酒会社関係資料一括歴2005-

しかし、筆者はこれまでの分析の結果、地域における次なる本格的な葡萄酒醸造業の発展を準備した基盤として再評価できると考える。葡萄酒醸造業という新たな事業の可能性と共に当該期における限界性が示されたことは、産業導入の揺籃期において、次の世代につながる新事業・新技術導入のきっかけとしての歴史的意義を有していたという

ことができる。

以上の内容を「山梨県八代郡祝村における葡萄酒会社の設立と展開-明治前期の産業と担い手に関する一考察-」としてまとめ、2013年5月現在、『歴史地理学』に投稿し、査読結果を受けて若干の修正を行っている。

(3) 総括にかえて

本研究は在来産業と近代産業の展開と構造を視野に入れて、日本における在来産業と小規模家族経営の構造と論理を歴史地理学の視点から解明することを目的とした。事例1として入間織物業地域におけるレース産業の展開に着目し、地域の産業構造と家族の変化が相互に関連しあっていることを明らかにした。事例2として山梨県甲州市勝沼の葡萄栽培と葡萄酒醸造業に着目し、在来産業から近代産業への移行過程を明らかにした。両事例とも、新たな一次史料の発見を伴い、その整理・公表も本研究の成果の一つとなった。

産業構造全体の変化を明らかにするための作業はデータ収集にとどまり、事例を相対化するための枠組みを提示するまでには至らなかった。これを今後の課題として、引き続き調査研究を進めたい。

〈参考文献〉

- ・江波戸昭、日本における産業資本確立期の工業分布、経済地理学年報9、1964、pp70-80
- ・関権、製造業における近代産業と在来産業の構造変化-1909~40年『工場統計表』による分析、経済と経済学82、1997、pp.7-29
- ・谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業』1998、名古屋大学出版会
- ・中村隆英、在来産業の規模と構成、梅村又次ほか『日本経済の発展』1976、日本経済新聞社
- ・古島敏雄、諸産業発展の地域性、『日本産業史大系1』1962、岩波書店
- ・湯澤規子、漁業集落における家族就業構造と女性のはたらき-銚子沿岸集落を事例として-、石井英也編『景観形成の歴史地理学』2008、二宮書店、pp.297-316
- ・湯澤規子『在来産業と家族の地域史-ライフヒストリーからみた小規模家族経営と結城紬生産-』2009、古今書院

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ①湯澤規子、山梨県八代郡祝村における葡萄酒会社の設立と展開-明治前期の産業と担い手に関する一考察-、歴史地理学、査読有、55-3、2013(受理済、印刷中)
- ②湯澤規子、千葉県銚子市における根付漁業

の展開と海女の役割-長崎地区の「岡磯海女」と「腰っぺり海女」を事例として-、日本学、査読有、34、2012、pp.39-69

- ③湯澤規子、都市近郊農山村における高度経済成長期という経験-住民の就業履歴および平仙レース社内報『むつみ』の分析を通して-、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、171、2011、pp.43-64

〔学会発表〕(計5件)

- ①湯澤規子、葡萄栽培と葡萄酒醸造業の地域史-近代移行期の在来と近代-、越境する歴史学、2012年10月6日、東京大学
- ②湯澤規子、明治前期の山梨県東八代郡における葡萄酒会社の設立とその担い手、平成23年度経営史学会関東部会大会、2011年7月30日、慶応大学
- ③湯澤規子、明治前期の山梨県における勸業・勸農政策と祝村葡萄酒会社の設立-東八代郡祝村の近代化過程とその担い手に注目して-、慶応/京都連携G-COE 第11回History Seminar、2011年6月18日、慶応大学
- ④湯澤規子、近代移行期の甲州勝沼における葡萄栽培とワイン醸造業の展開-宮光園史料の分析を通して-、平成22年度経営史学会第46回全国大会、2010年10月2日、札幌大学
- ⑤湯澤規子、甲州勝沼におけるぶどう生産とワイン醸造の展開、歴博映像フォーラム5「平成の酒造り」、2010年9月4日、新宿明治安田生命ホール

6. 研究組織

(1) 研究代表者

湯澤 規子 (YUZAWA NORIKO)
筑波大学・生命環境系・准教授
研究者番号：20409494